

## 畜産ダイジェスト

# 和牛は食いつぶされている

肉牛経営の基本対策は全国どこの県でも頭痛の種となっている。牛肉の消費は増大し、和牛の頭数は減少している。今後の和牛の方向をどうするか？これは大問題であろう。(畜産情報)

### 和牛生産の方向

最近食肉需要の増加に伴い牛肉の消費も増えてきたため、役肉牛のと殺頭数も年々増加の傾向にある。しかし飼養頭数は減少しているか、よくて横バイ状態である。このままでは和牛は食いつぶされてしまいはしないか、という心配も出てきている。

では何故この需要の増加している役肉牛がふえないのだろうか。これには色々複雑な問題があるろう。

- 1、役利用の減退
- 2、子牛生産の収益低下
- 3、短期日での換金の困難性

このうち特にやっかいなのは、子牛生産が儲からないことである。

それでは儲かる生産をするには、いかにすべきか。言うまでもなくコストの引下げ—飼料費の軽減、多頭化飼養などによる生産性の向上によるほかはない。

### 効率的な牧野利用でコストの引下げを

和牛の生産（子牛生産）の飼養形式には、次のようなものがある。

- 1、放牧だけの粗放な型
- 2、舎飼いを中心とした集約的な型
- 3、改良された牧野で夏期放牧を行い、一方牧草

を増産して冬期用に貯蔵し、副業的に少数飼養するか、又は規模を拡大してゆく型

前二者は子牛の質が悪く、購入飼料費が高く飼養管理にも手間がかかっている。後者は草生がよく、多頭化で単位労働時間の節約を計るなどで高収益をあげているところが多い。

牧野改良を大に行い、過放牧を改め、放牧は夏だけでなく春秋の農繁期の労力が飼養管理にさかれるのを防ぎ、又飼養労働力を節約するため多頭飼育農家による共同放牧場を設けるとよい。更に樹間の利用、耕種部門と競合する飼料畑をさけて牧草畑を拡大するなどの方法で、飼料基盤の充実を計り、生産費の節約、生産規模の拡大を進めるならば、和牛飼養の収益もかなり高まるであろう。

### 牧草の管理技術の向上を計ること

和牛も少数飼育で高収益をあげることは難しい。多頭化が必要であり、そのためには牧草採草地の確保はどうしても欠かせない問題である。

1頭1日の必要野生量を40kgとすると、1頭当り牧草畑10a、放牧採草地30aが必要である。ただこうした土地は誰でも確保できるものでなく。利用の仕方にも問題があるろう。そこでやはり多収穫をあげるには、放牧地の一部を飼料畑に変え、放牧地と飼料畑の二本立てを行うのが得策である。

また改良牧野にするには多額の費用を要する。これを生かすためには牧草技術の向上が望まれ、飼養技術の徹底も必要である。

## 豚肉の高値と今後

豚肉価格はついに3年周期の絶頂期を越え、やや下げたがまだ高水準である。しかし、生産は予想ほど増えないと言われ、従って多少は下げても本格的な安値が予想されるのは来年後半であろう。

但し、各地とも昨年の暴落による痛手のため生産の減少が目立ち、飼育熱は肉相場に良いわりには低

く、前年に比べ、頭数は2、3割減である。今後もやや増える程度の伸びに滞るであろう。特徴としては、新規又は小規模飼育者がこれまでと違って、高値だからと言ってすぐ養豚にとびつかなくなったことである。つまり多頭飼養家により頭数を増す傾向が目立ち、飼養者が固定化してきている。

見通しとしては来年の値下りを警戒してなかなか増加せず、産地もこの高値にとまどっている感じで、

## 岡山畜産便り 1963.12

生産が回復するのは来春以降とみられ、各地とも豚肉がいくら高くても生産はやや上向くだけというのだから、いかに一昨年暴落による傷が深かったか解ろう。

これら飼養の傾向は、各地とも労力不足、自給飼料が割高、給与、保管が困難なことから多頭飼育者は購入飼料への依存度を強めている。今後は購入飼料を合理的に給与することにより、飼料費、労力の節約、更には肥育期間を短めて経営の合理化を計るべきである。

この好況に子豚価格も上々で、大きさ、品質差もあるが、5千円台から1万円近くまである。今が最高であるが、種付けが少ないので大幅に下げることにはあるまいとの見方が多い。一代雑種ブームを呼んだランドレースと中ヨークシャーの一代雑種は市場によっては6～8割を占めるまでになっている。

とにかく子豚は今後の豚肉価格次第でそれが生産にまで響くことになる。

(農業新聞 38、10、9)

# 農 林 省 バターを買上げ 学校給食 向け生乳供給量ふやす

## —牛乳対策打出される—

農林省は10月21日当面の牛乳、乳製品対策として

(1) 第三学期の学校給食向け生乳供給量を当初予定より増加する。

(2) 畜産振興事業団の手持ちバター650tのうち600tを学校給食用に放出する。

(3) バターが適正在庫量になるまで、事業団にバターの買入れを実施させる。

(4) 練乳類は乳業者団体に自主整調保管させる。ことなどを決定した。

こうした対策はこのところ悪化している乳製品の市況を回復させ、乳価の安定を計るために打出されたものである。

現在乳製品の市況はバター(kg当り)429円、全脂加糖練乳(24.5kg当り)3,609円、脱脂加糖練乳(25.5kg当り)3,290円で、いずれも安定下位価格(バター478円、全脂加糖練乳3,900円、脱脂加糖練乳3,400円)を下廻っている。

特に、市況が低迷しているのはバターで、在庫量は5.5～6千tと推定されている。このため農林省としては、申請があれば安定下位価格で事業団買上げを実施、下位価格にまで市況を回復させる方針である。

このような乳製品の買上げ保管措置と同時に三学期の学校給食向け生乳量の増加が決ったわけで、これは言うまでもなく乳価値下げの口実となっている。冬期の生乳需給の不均衡を無くするとともに、最近、一般的に脱脂粉乳より生乳給食の増大を望む声が、強くなって来たからである。

本年度当初の学校給食向け生乳供給量は22万石であったが、二学期末までに17万石が消化される見込みである。更に三学期も希望が強く、供給希望量は8万石以上になると推計されている。この供給経費は事業団の本年度交付金から3億円内外が、更に支出されることになる。

なおこのような乳製品対策と併行して、農林省は乳価紛争の打開を計る方針で、乳業メーカーに対し、さらに乳価値下げの撤回を求める考えである。

(畜産情報 38、11、25)

## 多頭羽飼育の方向へ

### ＝県下農業実態の変動＝

岡山県の農業実態はどのようになっているか。去る2月1日理在で行われた岡山県統計課の、耕地、

家畜、農機具についての調査結果によると、県下の農家経営は35年に較べて激動しており

(1) 耕地は田畑が減少し、果樹園芸などが増えて食糧生産型から商品生産型の農業へ転換している。

(2) 一戸当りの飼育家畜数は増加しており多頭化飼育の方向にある。

## 岡山畜産便り 1963.12

(3) 機械化が目立ち、耕地面積の大きい農家ほど所有台数が多い。

等々の点が顕著である。

次に詳細な数字は表のとおりであり、どの家畜も一戸当りの頭羽数は増加しており、明らかに多頭羽飼育の方向に進んでいる。

(山陽新聞)

	飼養農家数		飼養頭羽数		1戸当り頭羽数	
	38.2	38/35	38.2	38/35	38.2	38/35
乳牛	戸 11,455	% 110	頭羽 26,524	% 150	頭羽 2.3	% 135
豚	2,571	100	10,156	165	4.0	166
和牛	61,242	82	82,836	93	1.4	116
鶏	89,901	88	2,305,718	125	25.6	143

### ▽……豚のエサは粉飼で……▽

豚の唾液は澱粉質を消化する力が、非常に強い。だが、ねり餌や、すりイモをやると、すぐ吞んでしまい、せっかくの唾液の消化力が働かないことになる。

そこで肥育豚の手間をかけず、しかもエサを経済的に生かして使うには、粉餌のままで与えよう。農林省畜産試験場で調べた成績によると、ねり餌より粉餌のほうが消化がよく、養分総量で16%も多くなっている。

従って、イモ類も乾燥粉末に加工したほうがよいのである。